

きめないで与えるもの”に多いことをみとめた。

(3) 都市と農村における1才6か月歯科健康診査結果の比較

森本は東京都練馬区および茨城県茎崎村において昭和53年に行われた1才6か月児歯科健康診査の結果を比較し、う蝕罹患状態は、都市部に高く、よごれについては農村部において高い値を示し、これらはその検診の方法に考慮すべき点のあることを示唆した。

② 幼児の歯科診査時に得られた情報の将来のう蝕罹患の予測性推定の基礎についての検討

(4) 幼児のう蝕罹患型の分類と予後の推定

竹内は1才6か月児の上下顎乳中側切歯8歯のう蝕罹患の組合わせにより、3型に分類したう蝕罹患型の予後について、前報にひきつづいて検討し、1才時におけるこの分類の予後との一致性は実用上有用とは考えられなかったが1才6か月時以後ではきわめて有用であることを確認した。

(5) 幼児の歯科健康診査並びに問診結果とう蝕罹患の予測性との関係

榊原、伊塚、中垣および石井は、前報に報告した名古屋市内で定期的に幼児の歯科保健管理を行っている群について、1才～1才6か月時の診査結果および問診結果と、1年6か月後のう蝕罹患状態との関係について調査し、間食回数4回以上、間食からの砂糖摂取量21g以上およびブラク指数2以上の3つの条件のものは1年6か月後のう蝕易罹患傾向を識別し得ることをみとめた。

③ 幼児の歯科保健管理方式の費用便益的分析について検討

(6) 小都市における乳幼児歯科保健管理の経年的調査 その3 費用分析的検討

榊原、中垣、石井、岩崎および高山は、愛知県尾張旭市において行っている乳幼児歯科保健管理事業について、1才6か月時から継続して管理された群と、2才以降から管理された群とについて、高度う蝕罹患状態を指標として、その費用・便益的分析を試み、この管理方式の改善の必要をみとめた。

(1) 僻地における乳幼児歯科保健管理事業の効果

谷 宏 (北海道大学歯学部予防歯科教室)

北海道上磯郡木古内町において、昭和51年度より、1歳6か月から就学前までの幼児、約600名について、経年的に年2回、歯科保健診査、指導およびう蝕予防処置を行って来た。

そこで昭和54年度まで、4か年にわたるう蝕罹患性の推移および生活習慣の推移の一部を報告する。

一人平均 dmft でみると、2、4、5才児は徐々に減少傾向が続いている。3才児について51年より52年にかけて大巾な減少をみてからは、ほとんどう蝕数の減少がみられない。(図参照) 札幌市の保育園児においてもう蝕数の減少傾向が51年ぐらいからみられるが、本町幼児の54年の結果は札幌保育園児の51年のう蝕数とほぼ同じレベルまで減少したと考えられた。

乳臼歯に高度う蝕を持つ者の割合も著しく減少しており、処置を受ける者の増加傾向ともあいまって、歯科保健状態は徐々に向上しつつあると考えられる。(図参照)

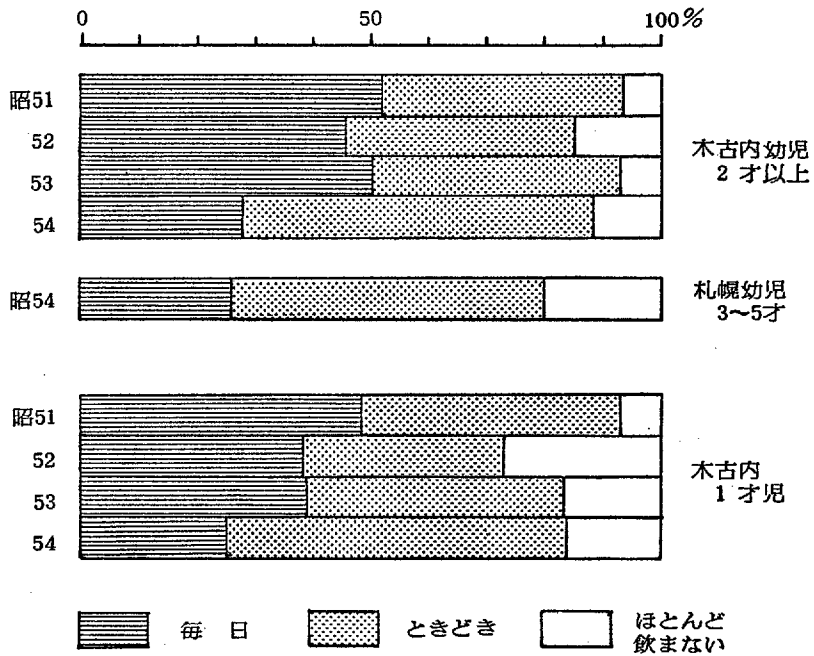
生活習慣の変化については、子どもの歯をみがいてやる母親が著しく増加していることがあげられる。その率が最も高い2才児では、4年間に20%から50%以上に達し、まったく子どもの歯をみがいてやらない母親は極めて少なくなった。子どもの歯みがき習慣も定着しつつあると考えられ、木古内の幼児の歯は51年度に比べて著しくきれいになった。

清涼飲料の摂取については53年まではほとんど減少がみられなかったが54年に入ってようやく減少した。(図参照) 清涼飲料の摂取にはかなり広く注意がむけられるようになったと思われる。51年当時1季節保育所では午睡時に哺乳ビンによって清涼飲料が与えられていたという特異な現象もなくなった。

アメ・チョコ・ガム類の摂取も減少傾向がみられるが清涼飲料ほど著しいものではない。しかし食生活、間食の与え方にも注意がむけられ、異常な与え方をしている母親は極端に減少したと考えられる。

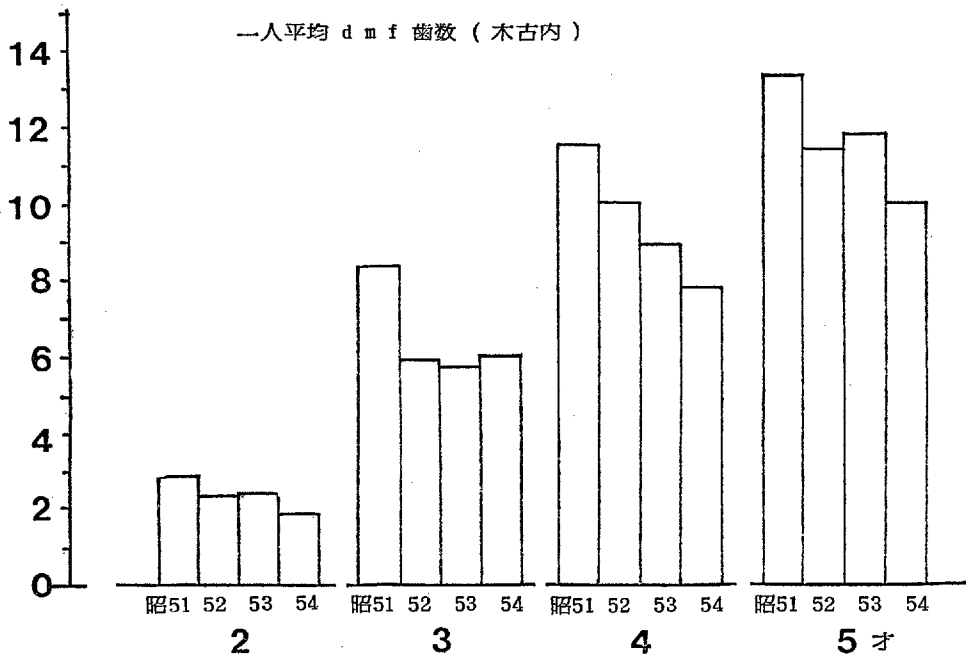
牛乳の摂取についてはほとんど変わらず、札幌に比べて牛乳を飲んでいないと思われる。

都市とは異なる文化を共有する人々の手によって、幼児の間に広く蔓延しているう蝕の原因を日常生活の中に見い出し、そして解決する方法をみい出してはじめて地域の歯科保健の向上がはかれるものではないかと考えられた。



(図1) 清涼飲料水類の摂取状況

6月調査



(図2)



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



北海道上磯郡木古内町において、昭和51年度より1歳6か月から就学前までの幼児、約600名について、経年的に年2回歯科保健診査、指導およびう蝕予防処置を行なって来た。そこで昭和54年度まで、4か年にわたるう蝕罹患性の推移および生活習慣の推移の一部を報告する。